心ゆたかに

第９４号　発行日　平成２３年７月１日

発行　株式会社天峰建設　袋井市横井 115-3
TEL0538-43-6773　FAX0538-43-7250
ホームページ http://www.tenpou.co.jp/
Ｅメール　tenpou@mail.wbs.ne.jp

臨済宗方広寺派 長泉寺様で上棟式

静岡県浜松市東区小池町

長泉寺様の上棟式の様子（平成２３年５月）

去る五月十三日（金）、静岡県浜松市東区小池町の小池山長泉寺様（林隆道住職）において、庫裡と書院の上棟式が執り行われました。

式典当日は天候に恵まれ、大勢の檀家さんが早くから集まっていました。厳かに式が進められ、関係者一人一人が焼香して今後の工事の無事を祈りました。

式典が終わるとお餅撒きが始まりました。建設中の建物だけでなく、特別に設えた舞台からもお餅が撒かれ、小さな子達も歓声をあげて一生懸命拾っていました。

一時期は震災の影響で建材の入手が困難となり、工期の遅れの可能性も危惧されましたが、現在は順調に推移しており、十一月上旬の完成を目指しています。

曹洞宗華蔵寺様で解体法要

静岡県浜松市北区三ヶ日町

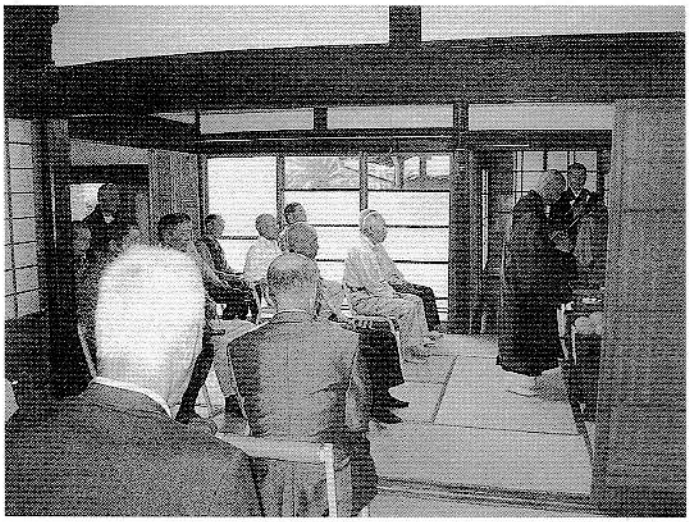
去る六月二十日（月）、静岡県浜松市北区三ヶ日町の清浄山華蔵寺様（伊原憲幸住職）で庫裡の解体法要が執り行われました。

当日は少し小雨が降りましたが、既存の庫裡の中で問題無く法要が行われました。建設されてから二百年以上が経つ庫裡は老朽化が進んでいますが、皆今までの感謝の気持ちと別れを惜しむ感慨深い気持ちで一人一人焼香し、工事の無事を祈願しました。

法要後、住職からお言葉があり、やはり長年住み慣れた庫裡に対する感謝の気持ちと愛着を述べられました。また、檀家数が多くないため一軒当たりの負担のことも気を遣われながら今後の協力を重ねてお願いされていました。

天峰建設としてもそんな住職のお気持ちに沿うよう最大限努力致します。

上棟式は九月十日（土）の予定です。



華蔵寺様の解体法要の様子（平成２３年６月）

「寺離れなど、厳しいお寺の打開策はあるのか」

日本テンプルヴァン㈱　井上文夫

「仏教会や各宗門の住職研修会で感じること」

最近では、筆者が受託する「地区仏教会や各ご宗門の住職・副住職あるいは寺族向けの研修会」で求められるテーマには共通性がある。最も多いテーマは「お寺の経営環境の厳しさ」や「その背景となっている社会現象等」についての話である。

五月中旬にある宗派研修会にお伺いした時に、私が困るようなちょっとしたエピソードがあったので紹介する。それはご当地に関わらず、どこの主催者でも同様であるが、私が講演でお話をする時に決まって要望されることがある。それは「お寺の将来が危惧され、現状でもこれだけ厳しい状態であるが、そのことに対し僧侶は全く危機感が乏しいので、講師からも厳しく警鐘を鳴らして欲しい」というものである。これは言葉の表現に違いこそあれ、どの地区仏教会あるいは宗派研修会でも、全く共通する要望である。別の言い方をすれば、このようなことに全く触れないご依頼は少数派であるともいえる。

本来僧侶でもなく、一営利企業の経営者の立場から申し上げる「今後のお寺や僧侶の在り方」について、いくらこのような主催者の要望があるといっても、在家者の私から申し上げる内容には限界がある。私としては、精一杯厳しいことを申し上げているつもりである。しかし講演終了後、あるいはその後に伝わってくる反響では「もっと厳しい意見がでるかと思ったが、そうでもなかった」という評価というべきご批評を何人もの方から頂いた。

これには違和感を覚える。では私が徹底的に厳しく僧侶のあるべき活動を求めたら、果して本当に期待通りの行動につながるのか、疑問に感じるからである。

「今後のお寺や住職の活動には悩ましい問題が」

今後のお寺を取巻く環境の厳しさを訴える論調は多い。そのどれもが「葬式仏教からの脱却をいい、今後は社会参加型仏教の展開を推奨する」というものが目立つ。しかし、このような主張を行っている者は、すべて僧侶以外の在家者であることが多い。そういう意味から言えば「机上の理論」との誹りを免れない。また現役の住職や僧侶

（次頁へ）

である立場で「社会参加型仏教の推進」を提唱している人々に類似点が見られる。

それはその人々がいずれも肉山か、さもなければＭＢＡの取得者などの極めて高学歴の者ばかりである。つまりその人々は客観的な視野を持ち、お寺の置かれている将来を外部から俯瞰する能力があり、かつ新しい時代にお寺の活動はどうあるべきかのアイデアが豊富である。元々これらの人々は、僧侶や住職でなくとも、どんな職業についても立派にやっていける人々ばかりである。

ところがどうだろうか。これらの人々が奨めている「新しい時代に向けたお寺の活動」のほとんどが、働けど働けど、寺院経済に寄与するにはほど遠く、反対に経費や時間ばかりがかかり、今現在の寺院の経済基盤向上に寄与する、ということには程遠いものといえるものばかりである。

肝心なことは、この問題を解決できるのは、当事者であるご住職本人だけである。そのご本人が時代に合致し、自坊に適した活動内容を考え、自らを律して厳しく対応していかなければ、一体だれがやるのか。ご本人しかないのである。今のままの活動を、見直しもしないでこのまま続けたとしたら、本当にその将来は現状よりさらに厳しくなることは明らかであり、そうならないことを願うのみである。

曹洞宗興徳寺様で完成見学会

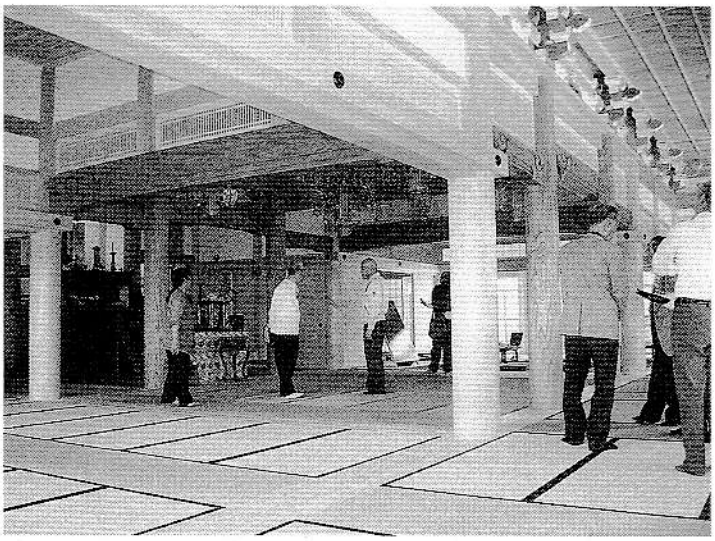
静岡県磐田市森下

去る五月九日（月）、静岡県磐田市森下の長松山興徳寺（八神英典住職）で、完成見学会を開催いたしました。

当日は天候に恵まれ、汗ばむような陽気の中を、三〇箇寺近くもご来場下さいました。世話人さんたちを同行されている寺院様もあり、一時的に案内と説明をする者の手が足りなくなるくらいでした。

興徳寺様の本堂の出来栄えに感心されたり、位牌転倒防止柵に興味を持たれたりと、いろいろと参考にしていただいたようです。

三種類用意した記念品や手土産のまな板も、それぞれ好評だったようです。



興徳寺様での完成見学会の様子（平成２３年５月）

知って得する

鰻（うなぎ）の話

この原稿を書いている現在、まだ静岡県では梅雨が明けたと聞かないのに場所によっては気温が三十五℃を超える猛暑日が続いていて、どこか涼しい地域に避暑にでも出掛けたい衝動に駆られます。外回り中暑さに参っていると目に付くのは鰻の看板。今回は鰻の話です。

土用の丑の日に鰻を食べる習慣はエレキテルの発明で有名な平賀源内によって江戸時代に広められたという説が有名ですが、当時は土用の丑の日に「う」の付くものを食べると夏負けしないとされ、うどんや梅干し、馬肉などが食べられていました。夏場になると鰻の消費が落ちることに悩んでいた鰻屋から相談されて、「本日、土用丑の日」と書いた張り紙を出させたところ、大繁盛となったのでした。ただ、奈良時代には既に夏バテ対策に鰻を食べると良いとされていた様で、夏やせに鰻を勧める大伴家持の歌が万葉集にあります。

自分自身もやはり夏バテをしないように考えて、この時期牛丼のチェーン店などで安いうな丼を売り出してくれることもあるので、鰻を食べるのは夏が多いのですが、実は鰻の旬は冬眠に備えて養分を蓄える晩秋から初冬で、旬ではない夏は味が落ちるのだそうです。平賀源内以前の江戸の人々が余り夏に鰻を食べなかったのは、ちゃんと旬を分かっていたなかなかのグルメだったからなのでしょうね。

味が旬に比べて落ちるとは言っても、鰻には魅力的な栄養がたくさんあります。それに、ダイエットのことを考える場合には夏の鰻の方がカロリーが低いのは確かです。皮膚や粘膜の潤いを保つビタミンAが牛肉の二百倍、炭水化物の代謝を助けるビタミンB1、脂質の代謝を助けるビタミンB2、老化を防ぐビタミンEなどが豊富に含まれています。カルシウムなどのミネラルも豊富で、まさにスタミナ食です。DHAやEPAも豊富で血液中のコレステロールを下げるなどの健康維持にも役立ちます。

今まで食わず嫌いだった人も是非健康のために鰻を食べることをお勧めします。